名の孤独―「バチェラー・八重子」小論―（上）

丸山隆司

どういうふうにして、どういうわけでこの名前をもらったのか、思いだすことはできません。一つの名前を、ほかの名前よりずっとその人らしくするのは、いったい何でしょうか。それでは、名前は生あるものなのでしょうか。そして、人はその名前があらわすものにすぎないのでしょうか。

（トニ・モリソン「青い眼がほしい」2001。原題：THE BLUEST EYE。265）

え？名前のことですか。
それなら、貴方の好きに呼んでください。
どんな名前でも私の名前であって、私の名前ではないのですから。

（無名氏）

目次

1　三つの名
2　小説「遙かなる彼方」（以上89号）
3　歌集『若きウタリに』
4　「賛辞」という言説
5　ひとりで生きる／ｙａｙ－ｋｏ－ａｎ（90号）

1　三つの名

その女の子が生まれたのは、一八八四（明治十七）年六月一三日、場所は北海道胆振国有珠郡有珠。女の子はフチと名づけられた。その子には四歳上の姉があった。名はトミ。その子が生まれた三年後、妹が生まれる。トヨと名づけられた。そして、さらに六年後、弟が生まれる。山雄と名づけられた。さらに、その二年後、もうひとりの妹が生まれる。チヨと名づけられた。

トミ、フチ、トヨ、チヨの四人の姉妹と男の子の姓は向井という。父の名は向井富蔵、母の名はフユ、しかし、両親には、それぞれモコッチャロ（あるいはモチャロ）、フッチセという、別の名があった。それは、アイヌとしての名であった。その子どもたちの名はひとつだ。しかし、そのなかでアイヌとしての名をもつのは、フチと名づけられた、その女の子だけである。向井フチと名づけられた、その子は、のちに、名を八重子（八重）と改め、さらに、姓もバチェラーと名のることになる。すなわち、

向井フチ
向井八重子
バチェラー・八重子

という三つの姓名を生きたことになる。

だが、フチから八重子への改名は、いつ、どのように行われたのか。

八重子が一二歳のとき、父・富蔵が亡くなる。その二年後、八重子は、ジョン・バチェラーが札幌で経営していた「アイヌ・ガールズ・ホーム」へ身を寄せる。バチェラーの庇護のもと、八重子は、東京の香蘭女学校（聖ヒルダ女学校）に通い[☆1]、キリスト教伝道師に向かっての一歩を踏みだすことになる。八重子が二二歳（一九〇六［明治三七］年）のとき、バチェラーは、彼女を養女に迎える。そのときの契約書に記された名は「向井フチ」である。だが、バチェラーの家では、彼女は、「フチ」と呼ばれてはいなかったようだ。たとえば、一九一二（明治四五）年、バチェラーは、樺太伝道旅行（四度目）についてのCMS（Christian Mission Society）への報告書に「私は七月一日、兵藤婦人伝道師と八重子を同伴し……」と記している[☆2]。この「八重子」という名について、掛川源一郎は、つぎのように述べている[☆3]。

――八重子は幼名をフチといったが、その名を嫌ってのちに八重と改めた。正式な改名届は、昭和三六年（1961）十月二一日に伊達町役場が受理している。／フチとはアイヌ語で老女とか祖母という意である。彼女自身は、〈ヤエ・バチェラー〉とか、〈バチェラー・八重子〉と名刺に刷ったり、書いたものに署名している。／姓のバチェラーBachelorはドイツ語のバチロルで、もともとは独身を意味する。〈ヤエコ〉もアイヌ語で独身を意味するのだと、筆者は八重子自身からきいたことがあるがたしかなことは分からない。（11。／は改行。以下引用文では同じ）

この掛川の記述のように、〈ヤエコ〉という名が、八重子自身の命名であり、そこに「アイヌ語で独身を意味する」ことを意図していたとしたら、八重子ないしは八重という漢字表記が想起させる、文字通り日本語の名のもとに、アイヌ語の名が秘められていたことになる。ちなみに、もし、〈ヤエコ〉という名が「アイヌ語で独身を意味する」とすれば、その「アイヌ語」とは、yay-ko-an（ヤィコアン：ひとりで暮らす。ひとり暮らしをする）、あ

るいは、yay-ekote(ヤイエコテ：ひとりで、ただし、このばあいは副詞）にあたるのだろうか。[☆4] しかし、八重子という名を自ら命名したとき、彼女は、同時にその名に「アイヌ語で独身を意味する」ことを意図していたのだろうか。いいかえれば、八重子という名は、はじめから「アイヌ語で独身を意味する」ことをひそませる／覆いかくすものであったのだろうか。掛川の記述にはそこに微妙なずれがあったかのようだ。八重子という名を彼女自身が選び取った時、必ずしもその名に「アイヌ語で独身を意味する」ことを意図したのではなかったとすれば、八重子という名が「アイヌ語で独身を意味する」ことをのちに発見したということになるだろう。もしそうだとするならば、彼女はふたつの名の間をどのように生きたのか。さらに、つけくわえれば、その姓・バチェラーを彼女はどのように生きたのだろうか。

出生のときに登録された「フチ」という名を「嫌って」、おそらくみずから「八重」あるいは「八重子」と名のることになったバチェラー・八重子は、その名のとおり、生涯、独身であった。もちろん、家族と呼ばれるものがなかったわけではない。父の死後の生家には、母と弟と妹たちがいた。しかし、八重子は、一四歳のとき、札幌のジョン・バチェラーのもとに身を寄せたままであった。そして、八重子は、二二歳のとき、バチェラー夫妻の養女になり、バチェラー・八重子という名の女性が誕生する。このときの「養子縁組契約書」の彼女の名は「向井フチ」であった。

その「養子縁組契約書」には、つぎのようなことが記されている。[☆5]

前記養女向井フチハ養父ジョン・バチェラー、養母ルイザ・バチェラーニ於テ幼稚ヨリ養育ヲ為シ衣服書籍及総テノ必要物ヲ供給シ且ツ養父母ノ嗣子トシテ継承ス可キ意思ヲ以テ教育シ、今般養嗣子トシテ養父母ノ戸籍ニ編入ス可キ筈ナルモ英国ニ於テハ養子ノ制度ナキヲ以テ茲ニ証人及関係人連署ノ上左ノ条項ヲ契約ス。

これにしたがえば、この「契約書」は当事者同士の契約であり、法的に正式なものではなかった。以下、四項にわたり、契約内容が記されているが、その第四項には、

何レノ一方ノ於テモ身分ノ変更ヲ生ジ戸籍ヲ同一ニスル時季ヲ生ジタルトキハ之ヲ登録スルコト。

とある。そうした観点からいえば、第三項に、

向井フチハ養父ジョン・バチェラー、養母ルイザ・バチェラーノ精神ヲ承継シテ同胞ヲ救ハン事ヲ生涯ノ勤メト為シ且ツ之ヲ永遠ニ伝フル事

という内容があるのは、「養子縁組」としては異例である。いいかえれば、彼女は、養父母の信仰するキリスト教を彼女の同胞＝アイヌに「伝道」する使命と引き替えに、彼女の生活を養父母が支えるという、そうした「養子縁組契約」を取り交わしたことになる。しかも、養父母との契約は、彼女の弟であり、戸主である

向井山雄と母親の向井フチッセとのあいだで取り交わされている（このとき、山雄はまだ一六歳であり、その親権者である母との連名である）。

すくなくとも、彼女には、この養子縁組以降、彼女の生家の家族と養父母の家族とのふたつの家族があった。そうした関係のなかで、彼女は、どのようにみずからを呼び、どのように呼ばれていたのだろう。養家では、彼女は「八重子」であった。バチェラー・八重子である彼女は、養父母とともにキリスト教徒として「同胞ヲ救ハン事」を目指して、「同胞」と向きあう。しかし、「同胞」にキリスト教を布教することが「同胞ヲ救」うこととは矛盾なく連動することだったのだろうか。

たとえば、バチェラーは、一八九九（明治三二）年のCMS宛の「北海道地方部札幌伝道地区の報告」のなかで、アリマクナというアイヌのことを「本国の友人たち」に宛てた手紙を引用して書きとめている。[☆6] アリマクナは、「たいへん早くから非常に敬虔な異教徒」であり、「彼の宗教の実践に最も熱心」だった。そのアリマクナは「二年前に受洗し……直ちに立派なクリスチャンにな」った、という。バチェラーは、アリマクナを「二週間前」最近クリスチャンになった「アイヌの酋長」のところに派遣し、「異教徒のシンボルやイナウとよばれている崇拝物をこわすのをアリマクナは助けました。よきかな！」と書いている。もちろん、アリマクナ自身も父親が死んだとき、「母親の身の回り品もいっしょに全部彼らの墓に埋めてしまい」「彼は私のためにこれらを今後使わないと両親に誓いました」という。つまり、アイヌが「立派なクリスチャン」になるということは、キリスト教から見て「異教のシンボルやイナウとよばれる崇拝物」をこわし、棄てることであったのだ。とすれば、アイヌにして「クリスチャン」という存在のカテゴリーはキリスト教徒であるかぎり認められなかったのだ。したがって、バチェラー・八重子が、先の契約のもとにバチェラー夫妻の養女でありつづけるためには、「向井フチ」というアイヌ名を棄て、バチェラー何某という新たな名をもたなければならなかったのではないか。しかし、そのような選択にあたって、彼女が選んだ「八重子」という名に、いわば掛詞的に、ヤイコアン yay-ko-an（なしはヤイエコテ yay-ekote）というアイヌ語が潜めていたとしたら、彼女自身は必ずしもきっぱりと「異教徒のシンボルやイナウとよばれる崇拝物」によって喚起される「同胞」の生活や文化を遺棄してはいなかったということになる。いいかえれば、彼女は、やはり、アイヌにしてクリスチャンという存在のカテゴリーを秘かにその名に残そうとしていたことになる。だが、はたしてそうなのだろうか。ひるがえっていえば、「八重子」と漢字で書かれたシニフィアンは、そのヤエコというよみとは別のコンテクストをもつ。それは、あきらかに日本語の名であり、アイヌにしてクリスチャンであること間に「八重子」という、もう一つの存在のカテゴリーを胎んでいる。これらの名が示す、すくなくとも三つ

の存在のカテゴリーを、彼女はどのように生き／生かされたのだろうか。

2　小説「遙かなる彼方」

八重子の生きざまをたどる手がかりとして、中條（宮本）百合子の「遙かなる彼方」という未完の小説を参照することは無駄なことだろうか。

一九一八（大正七）年三月から八月まで、バチェラーの家に中條（宮本）百合子が寄寓する。将来の渡米のため、外国の家庭での習慣と語学の学習の目的であった。百合子の父・精一郎は建築家であり、北海道帝国大学の校舎の設計に携わっていたことがあり、その折に知人となった植物学者・宮部金吾を通して、バチェラー宅への寄寓が申し入れられた。百合子自身もアイヌ民族に関心があった、という。[☆7] このとき、八重子はすでに三四歳であり、バチェラーとともに「同胞ヲ救ハン」ための伝道婦として樺太・北海道各地を廻っていた。百合子は、八重子の案内で、有珠・白老・日高を回った。百合子は、その調査旅行のことについてほとんど書き残していないが、そのときのことについての八重子の手紙が残されている。[☆8]

養父バチェラーの札幌の住いにて、北大創立当時、校舎を一手に引き受けられた百合子様の御父君の御紹介にあづかり、応接間にて写真を取り、後、有珠に向かって出発しました。有珠にてチャランケ岩、チャシ。次の白老コタンに参り鵡川へ行きました。鵡川の春日で大財閥大河原コビサントク方を訪伺、次にチンに参りました。ここではペテーゴロー（辺泥五郎）さんにお逢ひし、キリスト教講義所にて講義し、ユーモレスクを唄って（百合子さんが）人々に聞かせられました。次で平取の義経神社に参詣し、アイヌの旧跡を尋ね、エカシの頭や髭をなでられました。多くのエカシ達は大変嬉しそうだった事を思ひ出します。次にサルフトに参りました。旅屋に一泊し、最後の静内へ。そこにおいて、コロポックルのお爺さんに逢ひました。

このバチェラー宅の滞在中に書かれたのが、「風に乗ってくるコロポックル」である。それとは別に、百合子は、「遙かなる彼方」という未完の小説を書いていた。[☆9]

この小説は、海辺に近いアイヌの村（コタン）に住むウィリアム・D博士（ジョン・バチェラーをモデルとしている。以下、モデルと思われる人物を括弧に記す）とその妻・エリザベス（ルイザ・バチェラー）、養女・雪子（バチェラー・八重子）の生活を中心に、鴻蔵、二郎、岩四郎など村のアイヌとの関わり、そして、そこを訪れる石田蒂子（百合子自身）や泉という青年との交遊を、第三者の視点で語っている。

D博士は、三五年余り、アイヌの伝道と救済に身を捧げてきた。

そのD博士の養女となったアイヌである雪子は、D博士の同族にたいする献身的な伝道に共感しながらも、時折、つぎのような思いを抱く。

子供のころから、D博士の注意で教育されてきたお雪さんは、元より彼に対して、愛情を持って居た。宗教家としての信頼も尊敬も感じている。／其のみならず、一面からいえば、此の広い、此の目覚ましい事の沢山ある世界の片隅で、段々滅びて行く民族の、不幸を救おうとして、三十幾年かの間、ひどい努力を続けて来て呉れた恩人と云う尊さもある。／人に知られず山の中で年を取りながら、一寸目には何か当てもないような仕事を、倦きもせず、気まぐれもなく遣り通そうとする力に、彼女は深い感動も持って居る。／其等は、疑うべくもない。／けれども、彼女にとって師であるD博士との間には、折々何物かが薄寒い影を投げる。例えば今朝のように、暖かなるべき気分に、何となく寂寥たる一条の冷やかさが流れるのである。(64)

D博士のもとに石田蒂子という若い娘が訪れてくることに不安を抱いていた雪子は、朝食のとき、D博士に、蒂子がどのような人なのか、と尋ねる。しかし、朝食に同席していた「Sという同国人の宿客」と「猶太の復興」の話に夢中のD博士には、雪子の質問が聞き取れなかった。妻のエリザベスに注意を促されたD博士は、「あああああ。彼の人のことですか／さあ、私も知りませんね。しかし会って見たら解りますよ。何しろ目を二つ持って居るだけは確かだろうからねハハハハ大丈夫心配はいりません」と答え、またSとの話を続けた。雪子は、このD博士の大らかさに異和を感じる。そして、さらに、つぎのように思う。

其を感じる毎に、お雪さんの心は不安にならずには居られなかった。／いやな疑いが、危く跳梁しそうになる。／矢張り、先生は幾何(いくら)親切でも、結局「私共」ではないと云うような気がして来る。自分達の民族の上に深く、深く被い懸っている不幸。其の不幸に魂から魂へと蝕まれて、言葉に表わせない苦痛、泣けない涙に濡れて生活に居る者の、心の奥は解らないのではあるまいかとも思われる。／が、お雪さんは、自分の心が少許ばかりでも此那考えに傾こうとするのさえ、悪だと感じて居た。／人の心を疑う者。信頼仕得ない者。D博士によって、神を知り、神の御旨(おつげ)のままに、自分を導いて行くべき身が、その恩ある人に向かって、異端的な心持を持つことを、彼女は恥じずには居られない。／「御心が天に於ける如く地にも行わせ給え」(65)

百合子が描き出す雪子の内面が、そのモデルとなった八重子の思いと重なるわけでは、もちろん、ない。しかし、百合子は、たんに雪子の内面を描き出しただけだとはいえない。むしろ、英国生まれのD博士が、東アジアにある日本という場所で、「滅び行く民族の、不幸を救おう」としている、そのことが、救う者と救

われる者との間に生成する階層性がぬぐいがたく横たわっているのだ、ということを示唆している。それは、たとえば、つぎのようなエピソードに、たしかによみとれる。

樺太に渡っていた雪子の幼なじみの二郎が腕に怪我をして、村に戻ってきた。身寄りのない二郎を鴻蔵がD博士のところへ連れてくる。D博士は、急いで二郎を病院に連れて行き、手術を受けさせる。その費用をD博士が支払うことを病院に約束してきた、と雪子に告げる。

此処にも、お雪さんは、自分に若し金があったら！　と云う心持ちを痛感せずには、完く、余り悲しく痛感せずには居られなかったのである。／自分の家の息子の病気をなおしてやるのに、私が金を出してやりますからと云う親があるだろうか、／そうでなくても、若し二郎の、引いては彼の総ての仲間の名誉を少しでも高めようと思ったら、なぜ、たった一言、／彼が払うでしょう／と云ってくれなかったろう、／勿論、深い同情に依って、病院まで入れて貰った上、其まで望むのは、我儘ではあろうけれども、けれども――。／お雪さんは考えを追い払う事が出来なかった。自分には、僅かの物質上の力ほか無くって、如何(ど)う仕ようにも仕方ない苦しみに悩んで居る目前に、云わば、自分の血族が、「慈悲」を受けるのを見るに忍びない。／人からめぐまれた金で生活する者を見て、誰が尊敬するだろう、／そうされながら、人から侮蔑されるのを憤っても、結局仕方が無い、実際そうなのだからと云われる許ではあるまいか。／お雪さんは、熱い熱い火の塊が、体中焼け焦げそうに胸へこみあげて来るのを感じた。(92)

雪子は、自らの無力ゆえに、D博士の「慈悲」に甘んじなければならない「自分の血族」の無力に「苦し」む。「慈悲」に甘んじなければならないがゆえに、誇りを棄てなければならないジレンマに雪子は、ほとんど身もだえする。しかも、このすぐあとに、D博士を取り囲む会話で、「一人のアメリカ人」がニュージーランドの話をし、そのそばにいた、ミスL（婦人伝道師のエディス・マリー・ブライアントか）に、「ミスL、貴方の御国のニュージーランドでは……」といいかけたとき、

今までニコニコしていたそのミスLは急に真顔になって、そして挑戦的な口調で、

「御免下さい。ニュージーランドは、私の国ではありません。私は英国人でございます」

と、切口上で述べた。(93)

というエピソードが続いている。雪子は、これほどに誇り高く、自ら故国を宣言できるミスLの態度に打ちのめされる。つまり、「私はアイヌでございます」と「あの誇り、あの威厳を持って云い度かった」と。

百合子は、アイヌであることがどのようなことであるのか、雪子と関わる人々と出来事を通して描き出そうとしている。百合子

は、先に述べたように、実際に八重子に伴われてアイヌの村を回っていた。断片的であれ、この小説に描かれた雪子のさまざまな葛藤や苦悩を、百合子は八重子の口から、あるいは他のアイヌたちからも聞いていた可能性がある。おそらく、そうした経験なしには、この小説に描き出されたアイヌであることの問題群を書くことはできなかっただろう。

だが、残念なことに、この小説は未完である。雪子を通して描き出されたアイヌであることの問題群が、この小説のなかでこれから先に起こるであろう出来事においてどのように問い直されていくのか、知ることはできない。[☆10] 百合子が、八重子をモデルにした雪子という女性を通して描き出したアイヌであることの問題群に、モデルである八重子はどのように向きあっていたのか。百合子の小説を媒介にして、八重子の位置について測量してゆこう。

注

1　八重子が、香蘭女学校（聖ヒルダ女学校）にどのような資格で通っていたのか、明確ではない。現在の香蘭女学校に、当時の学籍簿などの有無について確認したが、残っていなかった。

2　仁多見巌訳編『ジョン・バチェラーの手紙』(1965)。271

3　掛川源一郎『バチェラー八重子の生涯』(1988)。

4　前者は、中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』、後者は、田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』(1996)

5　注2同書。242–243

6　注2同書。220–223。このエピソードは、バチェラーの文章ゆえなのか、訳文ゆえの問題なのか明瞭ではないが、文脈のたどりにくい点があることを断っておく。ちなみに、アリマクナは、清川戌七という日本語名をもつ。早川昇『アイヌの民俗』(1970。岩崎美術社）に、「第十七話　「アイヌの父ジョン・バチェラー翁の助手としてのアイヌ、私」という談話が掲載されている。

7　一九一八年の百合子のバチェラー宅滞在と調査旅行について触れている、以下のような研究がある。大森寿恵子『若き日の宮本百合子―早春の巣立ち―増補版』(新日本出版社。1993)。格清久美子「未発表作品『風に乗ってくるコロポックル』―宮本百合子とアイヌ民族―」(岩淵宏子・北田幸恵・沼沢和子編『宮本百合子の時空』所収。翰林書房。2001)。なお、この小説について、鷲沢セツ「二〇世紀から二一世紀へ「遙かなる彼方」物語」(北海道女性史研究会『女性史ほっかいどう』第2号。2005.8）がある。なお、ここでは、注2仁多見同書のの記述も参照した(298–299)。

8　八重子の手紙は、木原直彦「百合子とアイヌ」(『北海道新聞』1964.2.13)、同「バチェラー記念館―若き日の宮本百合子のこと」(『北海道放送ネットワーク』1964.7）から注2仁多見

同書に引用されている。

9　『宮本百合子全集』巻二十巻所載（2002）。以下、本文引用は、この全集版からである。

10　この小説には、これから起こるであろう出来事の伏線が書かれている。たとえば、鴻蔵の親類の岩四郎は、「他の者は、どんな事でも、大抵「御上の御達」と云うと、無条件で肯って仕舞うのだが、岩四郎はそうでは無い」という人物である。この岩四郎は、伯母の老女が「村中の世話焼で、何か事が有れば、其人の口を借りて万事を処理しなければ成らない」男に、「地権がない地面を使用していると云う廉で訟訴された」ことに黙っておれずに、提訴する相談をD博士としている。その土地は老女が五円を支払って地権を設定するとき、その男が世話したのだ（このエピソードは、実際に八重子が父の土地を奪われた事件をモデルにしていると思われるが）。この訴訟がどのようになるのかは、未完ゆえに描かれていない。これに関連していえば、一八九八年のCMS宛の一八九七―八年の年次報告において、「邦人教役者」の「寺岡氏」を紹介したなかに、つぎのようなことが書かれている。

……昨年の初めころ、彼は幌別の測量した土地に住居を建てました。そこで彼は、日本人とアイヌの教会を管理しています。後になって彼は幌別の日本人とアイヌの間に起ったある「土地横領」のトラブルのために幌別から有珠に移転しました。そこで彼は、アイヌに同情し味方をして、新聞社にかけ込むと日本人をおどしたりして、指導しました。／彼は現在、有珠で快適に暮らしており、そこから幌別に巡回しています。（注2仁多見同書。209～210）

聖職者が土地問題に関わることによって生じる布教のうえでの困難が予想される。つまり、「アイヌに同情し味方をする」ことによって、日本人の信者たちの間に起こるだろう波紋は、この地での布教にとって必ずしもよい方向ではない。しかも、そのように「アイヌに……味方をする」ことがはたして神の正義であるのか、という難問をも引き起こす可能性をもっている。

〈まるやま　たかし／本学教授〉